

福永光司元京大・東大教授が解読された 大江雲澤の著書の内容

中津医学校の初代取立方、すなわち校長であった雲澤が、華岡青洲を師として医学を学び、その後、中津においてどのような医学思想で医学生を教えたかを知るに重要な雲澤の著書は、その弟子大江寛、伯容が雲澤の講義を口述筆記したもので、原著は漢文である。

著書は『雲澤先生痢疾口授』『癥瘡經驗方』叙『付録』よりなっており、特に後二者は、雲澤の医学・医療に関する思想が込められていて興味深い。

<『癥瘡經驗方』叙

—（医師の）陳九韶は、子孫が断絶するに違いない。悪例の口火を切ったからだ。彼の著述した『癥瘡秘録』は奇々怪々の書物である。世間の火を通した食物を好んで、我が家の自然食にケチをつけるものは、ひそみにならうといった通り、わけも知らずに陳九韶の真似をして、奇を好み、怪を好み、でたらめに毒薬を投与して、かの人の子を損なっている。そしてたまたま功を奏するものがいても、或いは一年、或いは二年、或いは三、五年の後に必ず胸痛を発し、血を吐き、鼻血を出す。疾患これを名状すべからず、症状は到底治すことはできない。だから陳九韶は子孫が絶えるに違いない。悪例の口火を切ったからだというのである。—

私はたいへんここのことをあわれに思う。昔かの書物を読んで今に役立て、志を深くし、思いを積み、癥瘡の治療法について頗る会得するものがあつた。然れども、才劣り、智暗く、病氣治療に必要な天候、季節の移り変わり、病氣の原因や伝染、患者の嗜好などについて明らかにできなかった。凡庸な医者でも癥瘡を治せるという評判が立てば、すぐに訪ねて行って教えを乞い、一言も聞き漏らすまいと、聞き耳を立てた。

だから朝に一報を得、暮れに一術を得、これらを記録しているうちに、資料がうず高くつもった。

一番確かな治療例を集めて一卷にまとめた。名づけて『癥瘡經驗方』という。

医術を業とするものが、折につけ写させてくれとしきりに懇請するが、貸し与えて写し伝えるにしても、手に入れて次々に写し伝えるうちに誤謬が伝わることを恐れ、かくて出版することになった。

医を論ずる学者を以って自認し、前人未踏の新学説を補うなどと、いばるつもりは全くない。

臨床医学のうまいった実例を書きまとめて、極上の肉と酒を世の中に提供せんとするものである。

博学多識の人々のなおなおわが誤りを訂正して頂ければ幸いである。

弘化元年（1844年）一月二十五日

大江寛伯容題

付録

途中略

医則第一 医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す

（「仁ならざる」は「老子」第五章「天地は不仁・・・聖人は不仁」に基ずく）

第二則 実中に虚を察し、虚中に実を察す 医はなお兵（いくさ）の如し

第三則 病に対して利を図り、名を好み、インチキをしてはならない。己の蓄財のためでなく、天地大自然の命の営みを助けるためのものである。

第四則 寇（あだ）には矛（ほこ）をとり武を奪うを知るも、これを撫安するを知らず、

火には水をもってこれにむかうを知るも、火をもって火を制することを知らない。
根本を治めて末節を処理し、病気の原因を知って、その症状に対処する。
魚を取る網を使わないで、魚を取る方法を知っている人物でなければ、共にこの
仁術を語ることはできない。 >